

## バリ島の伝統芸能

小澤和恵  
(こども学科 教授)

バリ島海外研修では、学校法人カシ・サヤン幼稚園・小学校やサラスワティ外国語大学の訪問に加え、バリ島の芸能・音楽に触れる大変貴重な体験をすることもできた。バリ島では様々なスタイルで伝統芸能が残されているが、今回の研修期間に、ジェゴグ、ケチャックダンス、バロンダンスを観る機会を得た。

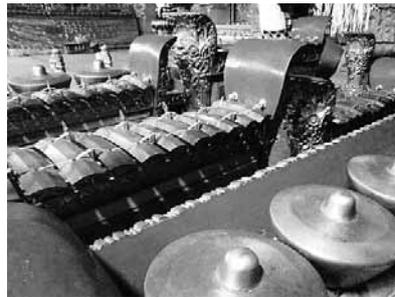
### <ジェゴグ (JEGOG) >

3月11日(水) 19:00~20:30, ジェゴググループ「ヨワナ・スワラ・ウブド」によるジェゴグ演奏とダンスの公演をプラダラムウブド寺院にて鑑賞した。ジェゴグ (JEGOG) とは、バリ島西部ジンプラナ県のヌガラ地方で誕生した、大きさの異なる14台の竹の打楽器によって構成されるアンサンブルで、水牛レース (ムカプン) の際に演奏されるものだったようだ。バリの音楽は普通5音階であるが、ジェゴグの音階は4音階とのことである。

寺院入り口でチケットを購入して会場に進む道はちょっと幻想的。会場に入ると、舞台左側にジェゴグの楽器(竹の木琴のようなもの)が並び、右側には、一般的ガムランの楽器(青銅製ガムラン)が並んでいた。



ジェゴグの楽器



ガムランの楽器

### プログラム

1. TRUNTUNGAN
2. PENDET DANCE
3. TABUH "MACAN PUTIH"
4. BARIS DANCE
5. BELIBIS DANCE
6. TABUH "PETEGAK"
7. GOPALA DANCE
8. MAKEPUNG DANCE
9. TABUH "GARI"

奏者が入ってきてそれぞれの楽器の前につくといきなり演奏が始まる。TRUNTUNGAN (トゥルントウンガン) は、村人達を集めるため鳴らされる「クルクル」の音を表した曲とのこと。

数人の美しい衣装を着た女性の踊り手が出てきてダンスが始まる。PENDET DANCE(ペンデット・ダンス) これはウェルカムダンスのようで、本来は、寺院の儀礼の際、神々の降臨を祝して踊られるとのこと。

次は、男の子という印象の踊り手が出てきて、表情豊かに踊る。これはBARIS DANCE (バリス・ダンス) で、若い戦士の踊りとのこと。小学校高学年くらいから舞台に出るそうで、バリの男の子憧れの踊りだそうだ。

BELIBIS DANCE (ブリビス・ダンス) は、アヒルが舞い飛ぶ様を表した踊りとのこと。白い衣装を羽のように広げ舞っていた。



PENDET DANCE



BARIS DANC



BELIBIS DANCE

GOPALA DANCE（ゴパラ・ダンス）は、バリの男の子が最初のころに習うバリ舞踊のひとつで、田んぼで働く農夫の動きを表した踊りだそうだ。男の子たちのコミカルな動きが印象的だった。

MAKEPUNG DANCE（ムカプン・ダンス）のムカプンとは水牛レースのことで、水牛役の女性4人と御者の男性の掛け合いや鞭遣いが楽しいダンスだった。



GOPALA DANCE



MAKEPUNG DANCE



終演時

始まってから1時間半、踊りだけでなく、竹のガムランを体いっぱい使って演奏する姿も素晴らしいパフォーマンスだった。高音から重低音までの竹を打つ音の重なりが力強くも心地よく響き、竹打つ音に体中すっぽり覆われた感じになった。

#### <ケチャックダンス>

ケチャックダンスは、バリ島で演じられている舞踊劇で、サルに扮した役100人の男性による「チャッ、チャッ、チャッ」という大合唱の中で物語は進行する。起源は、疫病や凶作など悪いことが続いた時に悪魔を鎮めるための儀式の中で踊られる「サンヒャン」というトランスダンスだが、1930年代にバリ島に住んでいたドイツ人の画家ワルター・シュピースによって、ラマヤナ物語を取り入れた舞踊劇入りの合唱という、現在上演されているようなスタイルになったと言われている。

上演時間になると、50人くらいの上半身裸の男性が、掛け声をかけながら現れ、内側を向いて放射状に座る。白い服を着た人が男性たちに何かを撒くと、「チャッ、チャッ、チャッ」とボイスパーカッションが始まる。それに歌も入り、独特の雰囲気となっていった。そこに、踊り手が登場し、物語は進んでいく。配布された資料によると、ラマヤナ物語のストーリーは以下のとおり。

1. ラーマ王子とシータ姫、ラーマ王子の弟ラクサマナの3人が広場に行くと、黄金の鹿が現われます。シータ姫はラーマ王子にその鹿を捕えてくれと頼みます。ラーマ王子は鹿を捕えるためにその場を離れると、シータ姫の助けを求める声が聞こえてきます。
2. そこへ悪のラワナが現れ、シータ姫をアレンカ宮殿へと連れ去ります。
3. シータ姫が宮殿の庭で自分の不幸を嘆き悲しみ泣いていると、突然白い猿のハノマンが現われて「私はラーマ王子の使いの者です」と言い、ラーマ王子がいつも身につけている指輪とメッセージを見せました。無事であることを伝えます。シータ姫は「早く私を助けてください」というメッセージと自分の髪飾りをラーマ王子に届けるようハノマンに頼みました。
4. ラーマ王子は悪の大王ラワナの息子であるメガナダと戦います。しかし、ラーマ王子はムガナダに魔法の矢で討たれてしまいます。そこへガルーダがラーマ王子を助けにやって来ます。
5. 猿の王様であるスグリワが猿の援軍を伴って現れ、メガナダと戦います。決戦の末、ラーマ王子と猿の援軍は勝利します。ラーマ王子はシータ姫を連れてアヨディア宮殿へ帰り、いつまでも幸せに暮らしました。



始まる前に



ケチャが歌われる中で

舞踏劇中ずっと声による伴奏と歌で進行していく。途中、猿役の踊り手が会場に下りてきて、観客一緒に写真撮影に応じるなどのサービスもあった。舞踏劇の後の「サンヒャン・ジャランダンス」では、男性が炊かれた炎の中に何度も何度も入って、炎を小さくしていった。資料には、トランス状態に入った少年が、ジャランと呼ばれる馬の模型にまたがって燃え盛る椰子の塊の上で踊るダンスで、トランスに入った少年は、火の熱さを感じないとあったが、どう見ても火傷しそうな迫力のダンスだった。

### <バロンダンス>

バロンダンスは、「ガムラン」という楽器を使用して行われる踊りである。配布された資料によると、バリ島の人々は、人の心の中には良い魂と悪い魂が同時に存在していると信じていて、この踊りは、人の心の中にある善と悪の戦いを物語っている。結果として、善悪両者とも決着つかないまま生き残る、即ちこの世には善悪が永久に存在するといった内容で、この踊りに登場するバロンという動物は良い魂を象徴し、それに対してランダという動物は悪い魂を演じているようである。



ガムランの演奏者



善を象徴する聖獣バロンと踊り手

ガムラン奏者が楽器にスタンバイして音楽が始まると、早速バロンの登場。大きな獅子舞という印象で、口をカツカツ鳴らしながら巧みな足さばきである。そして、下記のようなストーリーで舞踊劇は進んでいく。

1. サデワ王子は、この日バタリドリガという死神の生けにえとして捧げられる運命にありました。サデワ王子の母親（女王）の2人の召使はとても悲しがっています。2人の召使の前に死神の使いである魔女が現われ、サデワ王子が死神の生けにえになることを2人の召使に伝えます。2人の召使は魔女が去った後、サデワの国の首相にサデワ王子が生けにえにならない様に助けを求めます。
2. 首相と女王が現われます。女王はサデワ王子が生けにえにさらされるのをとても悲しがっています。魔女が現われます。魔女は女王の気が変わるのを恐れ女王に呪いをかけ、女王に首相にサデワ王子を生にえにするように命じさせます。

3. 首相はサデワ王子を自分の息子のように愛しており、女王の命令にそむこうとします。魔女はこれに気づき首相に女王と同じ呪いをかけ、サデワ王子を死神の住んでいる家の前に縛りつけさせます。
4. シワーの神様が現われます。シワーの神様はサデワ王子が木に縛りつけられているのを見て哀れみを持ち、サデワ王子を不死身の身体にします。
5. 死神が現われます。死神はサデワ王子を見て早く生けにえの儀式にとりかかりたいと思いますが、サデワ王子が不死身の身体になっているのを見て、自分の敗北を認めます。死神はサデワ王子に自分を殺してくれるように頼みます。死神は天国に行くことができました。
6. 死神の第一の弟子のカレカは同じように天国に行きたいと望み、サデワ王子に死神と同じように殺してくれと頼みますが、サデワ王子はこれに同意しません。そして、カレンは巨大な動物や鳥に変身してサデワ王子と戦いますが、いずれも負けてしまいます。カレンは最後の力を振り絞って悪魔の女王である「ランダ」に変身します。サデワ王子はこのままでは「ランダ」にかなわないことを知り真実の神「バロン」に変身します。「ランダ」と「バロン」の力が対応するため「バロン」は味方を呼びます。
7. 「バロン」の味方が現われ「ランダ」と戦います。しかし、「ランダ」の魔法にかけられて「ランダ」に対する怒りを全て自分達に向けてしまいます。「バロン」はこれを見て「ランダ」のかけた魔法を取除きますが、結局は「ランダ」と「バロン」の終わりなき戦いになります。

ジェゴクの響きやケチャックの人の声とも違い、金属楽器と笛のアンサンブルによる独特の音階が、儀式か祭りの神々しい響きに聴こえたが、登場する猿役や道化のコミカルな演技もあり、観光受けするように現代版的要素も感じられた。

3つの公演をとおしてバリの芸能と音楽に触れることができた。包みこまれるような独特な響きを堪能し、人の心や魂の原点に近い世界の魅力が少しわかったような気がする。